春宵十話

圖　潔

每日新聞社版

著者略歴

岡　潔（おか・きよし）
1901年大阪市生れ　京大理学部数学科卒　理学博士　奈良女子大教授
51年日本学士院賞　60年文化勲章受賞

春宵十話
定価　三八〇円
昭和三十八年二月十日第一刷
昭和三十八年四月十六日第六刷
著者　岡　潔
発行者　高木金之助
発行所　毎日新聞社
東京都千代田区有楽町一の十一
大阪市北区堂島上二の三六
北九州市門司区清滝町一の九〇二
名古屋市中村区堀内町四の一
印刷　中央精版印刷株式会社
製本　大口製本株式会社
〈検印廃止〉

© 岡　潔　1963

乱丁・落丁本はおとり替えいたします。

はしがき

人の中心は情緒である。情緒には民族の違いによっていろいろな色調のものがある。たとえば春の野にさまざまな色どりの草花があるようなものである。

私は数学の研究をつとめとしている者であって、大学を出てから今日まで三十九年間、それのみにいそしんできた。今後もそうするだろう。数学とはどういうものかというと、自らの情緒を外に表現することによって作り出す学問芸術の一つであって、知性の文字板に、欧米人が数学と呼んでいる形式に表現するものである。

私は、人には表現法が一つあればよいと思っている。それで、もし何事もなかったならば、私は私の日本的情緒を黙々とフランス語で論文に書き続ける以外、何もしなかったであろう。私は数学なんかをして人類にどういう利益があるのだと問う人に対しては、スミレはただスミレのように咲けばよいのであって、そのことが春の野にどのような影響があろうと

なかろうと、スミレのあずかり知らないことだと答えて来た。

その私が急に少しお話ししようと思い立ったのは、近ごろのこのくにのありさまがひどく心配になって、とうてい話しかけずにはいられなくなったからである。その結果がこの小冊子となった。

すべて、私が話したところを、毎日新聞社の松村洋君がまとめて文につづったものである。

一九六三・一・三〇

岡　潔　識す

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

目次

はしがき　一

春宵十話

人の情緒と教育　二

情緒が頭をつくる　一五

数学の思い出　一九

数学への踏み切り　二四

フランス留学と親友　二六

発見の鋭い喜び　三三

宗教と数学　三八

学を楽しむ　四二

情操と智力の光　四七
自然に従う　五一
*
宗教について　五九
日本人と直観　六四
日本的情緒　七一
無差別智　八六
*
私の受けた道義教育　九一
絵画教育について　九七
一番心配なこと　一〇五

顔と動物性　二〇
三河島惨事と教育　二三
義務教育私話　二七
*
数学を志す人に　一五九
数学と芸術　一七〇
音楽のこと　一七六
好きな芸術家　一七九
女性を描いた文学者　一八六
*
奈良の良さ　一九一

相撲・野球　一九四
新春放談　一九七
ある想像　二〇二
中谷宇吉郎さんを思う　二〇六
吉川英治さんのこと　二〇九
わが師わが友　二一六
あとがき　松村洋　二二九

装本　高木寛

春宵十話

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

春宵十話

人の情緒と教育
情緒が頭をつくる
数学の思い出
数学への踏み切り
フランス留学と親友
発見の鋭い喜び
宗教と数学
学を楽しむ
情操と智力の光
自然に従う

春宵十話

人の情緒と教育

私はなるべく世間から遠ざかるようにして暮らしているのだが、それでも私なりにいろいろ感じることがあり、世間の人に聞いてほしいと思うこともある。それを中心にお話ししてみよう。

これは日本だけのことでなく、西洋もそうだが、学問にしろ教育にしろ「人」を抜きにして考えているような気がする。実際は人が学問をし、人が教育をしたりされたりするのだから、人を生理学的にみればどんなものか、これがいろいろの学問の中心になるべきではないだろうか。しかしこんな学問はまだないし、医学でも本当に人を生理学的にみようとはして

いない。それをめざしているのかもしれないが、それにしては随分遅れている。

人に対する知識の不足が最もはっきり現われているのは幼児の育て方や義務教育の面ではなかろうか。人は動物だが、単なる動物ではなく、渋柿の台木に甘柿の芽をついだようなもの、つまり動物性の台木に人間性の芽をつぎ木したものといえる。それを、芽なら何でもよい、早く育ちさえすればよいと思って育てているのがいまの教育ではあるまいか。ただ育てるだけなら渋柿の芽になってしまって甘柿の芽の発育はおさえられてしまう。渋柿の芽は甘柿の芽よりずっと早く成育するから、成熟が早くなるということに対してもっと警戒せねばいけない。すべて成熟は早すぎるよりも遅すぎる方がよい。これが教育というものの根本原則だと思う。

戦後、義務教育は延長されたのに女性の初潮は平均して戦前より三年も早くなっているという。これは大変なことではあるまいか。人間性をおさえて動物性を伸ばした結果にほかならないという気がする。たとえば、牛や馬なら生まれ落ちてすぐ歩けるが、人の子は生まれて一年間ぐらいは歩けない。そしてその一年の間にこそ大切なことを準備している。とすれば、成熟が三年も早くなったのは、人の人たるゆえんのところを育てるのをおろそかにした

からではあるまいか。ではその人たるゆえんはどこにあるのか。私は一にこれは人間の思いやりの感情にあると思う。人がけものから人間になったというのは、とりもなおさず人の感情がわかるようになったということだが、この、人の感情がわかるというのが実にむずかしい。赤ん坊の心の大きくなり方を観察しても、最も難渋をきわめるのがここのところで、なかなか感情がわかるまでにならない。人類が人の感情がわかるようになるまでには何千年どころではなく、無限に近い年月を要したに違いないと思われるくらいにわかりにくい。数え年で三つの終りごろから感情ということがややわかるが、それはもっぱら自分の感情で、他人の感情がかすかにわかりかけるのは数え年で五つぐらいのころからのようだ。その間二年ばかり足踏みしていることになる。しかし、そのデリケートな感情がわからないうちは道義の根本は教えられない。

私も最近、最初の孫を持って、無慈悲を憎む心や思いやりの気持を持たせようと思い、感情がいつわかるようになるかと手ぐすねひいて待っているが、なかなかわからない。といって、いわゆるしつけは一種の条件反射で、害あって益のないものだからやりたくないが、あまり気ままの雑草が生い茂っても困るのでしつけをせねばならないのだろうかと悩んでい

る。やはり心を育てる時期はあるに違いない。それは植物でも茎、枝、葉が一様に平均して育つのではないのと同じことである。ある時期は茎が、ある時期は葉が主に伸びるということぐらいは、戦時中みんなカボチャを作ったから知っているはずだが、人間というカボチャも同じだとは気がつかず、時間を細かく切ってのぞいて、いいとか悪いとか、この子は能力があるとかないとかいっている。

どうもいまの教育は思いやりの心を育てるのを抜いているのではあるまいか。そう思ってみると、最近の青少年の犯罪の特徴がいかにも無慈悲なことにあると気づく。これはやはり動物性の芽を早く伸ばしたせいだと思う。学問にしても、そんな頭は決して学問には向かない。夏目漱石の弟子の小宮豊隆さんと寺田寅彦先生の連句に、小宮さんが「水やればひたと吸い入る墓の苔」と詠み、寺田先生がこれに「かなめのかげに動く蚊柱」とつけたのがある。小宮さんはこれを評して寅彦のつけ方のふわっとしていることは天下一品だといっているが、それはともかく、ちょうどこんなふうに、乾いた苔が水を吸うように学問を受け入れるのがよい頭といえる。ところが、動物的発育のためにそれができない頭は、妙に図太く、てんで学問なんか受け付けない。中学や高校の先生に聞いても、近ごろの子はそんなふうに教

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.